

2019-December
No.116

桜建会報

OKEN

contents

特集◎建築展覧会考——2

「A40@NU_2019 1977年以降生まれの日大出身建築家展」
出展建築家インタビュー 菅原大輔、落合正行、大西正紀
建築を展示すること 佐藤慎也

「吉田鉄郎の近代 モダニズムと伝統の架け橋」から 大川三雄
研究室紹介◎沿岸環境防災研究室 石鍋研究室
振動システム研究室 海洋建築構造デザイン研究室——12
事務局だより——14
学部ニュース——15



「FUJIMI LOUNGE」

写真／後藤連平

「建築展覧会考」より



「喫茶ランドリー」

写真／阿野太一



「いけのうえのスタンド」

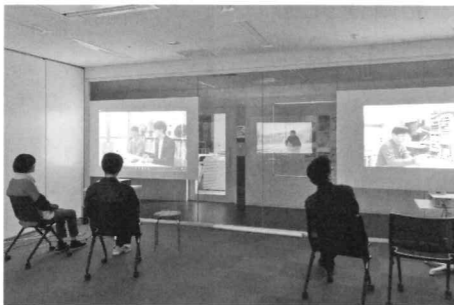
特集◎ 建築展覧会考

1977年以降生まれの日大出身建築家展「A40@NU_2019」の開催から考える

日本大学では、複数の学部、学科より、多くの建築系卒業生を輩出している。その中から、現在、建築家として活動している、1977年以降に生まれた卒業生たちに焦点を当てた展覧会「A40@NU_2019 1977年以降生まれの日大出身建築家展」(2019年12月10日～23日)を開催した。「A40」とは、around 40(=ほぼ40歳)を意味している。そして今回は、建築系学科のある理工学部、生産工学部、工学部だけでなく、**芸術学部や法学部を卒業した建築家の建築作品も出展**している。

建築家と言っても、さまざまな立場により設計活動を行う卒業生がいるが、設計事務所や建設会社などの意匠設計者だけでなく、構造設計者などのエンジニアも含め、さまざまな視点から出展建築家を選出した。そして、**学部や学科、専門を超えた卒業生たち、在学生たちが出会う**ことのできる場となることを目指した。選出の条件は1977年以降に生まれ、実賞、または建築専門誌に建築作品をととした。

現代の建築家にとって、単に建築なく、そこで行う活動をも自一般に開かれた場を創出で、今回の展覧会では、理工学部駿(S814 輪講室C)をメイン会場とし、サテライト会場として、建築作品の掛けを取り入れた。



メイン会場

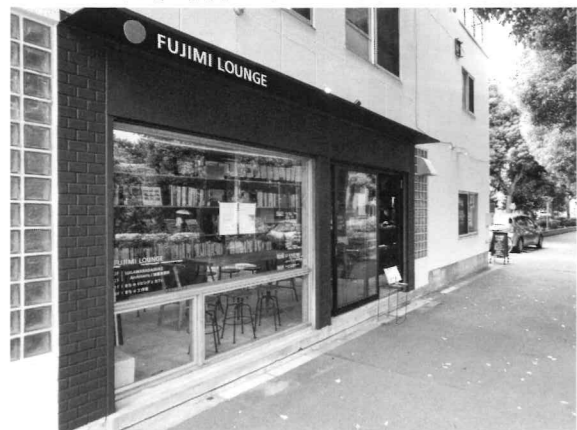
現した建築作品に関する賞を受発表した日本大学卒業生であること

作品を設計するだけでは分たちでつくり出し、する試みが広がっている。そこ河台キャンパスのタワー・スコラそのような「場を創った」実例を**実物を見る**ことができる仕

サテライト会場は、喫茶ランドリー(設計・運営/大西正紀)、いけのうえのスタンド(設計・運営/落合正行)、FUJIMI LOUNGE(設計・運営/菅原大輔)、家劇場(設計・運営/緒方彩乃)の4か所。メイン会場とともにサテライトでも、建築家たちへのインタビュー映像の展示と作品集の配布を行った。従来の建築展が、模型や図面、写真などによって構成されることに比べて、実物を目にできるこの展覧会は、画期的な試みとなった。

また、12月16日には、タワー・スコラ(スタジオ)で、シンポジウム(オウケンカフェ #50)を開催した。サテライト会場を設計・運営している大西正紀氏、落合正行氏、菅原大輔氏の3人をゲストに迎え、モデレーターを古澤大輔理工学部建築学科助教がつとめた。「A40@NU_2019」実行委員会

サテライト会場・調布PP.4-5 FUJIMI LOUNGE



写真/後藤連平

サテライト会場・上池台PP.6-7 いけのうえのスタンド



写真/堀田貞雄

出展建築家

2008年の「U41@NU_40歳以下の日大出身建築家展」から11年が経過した。そのときの出展建築家たち12組13人は、今でも一線で活躍している。今回の出展建築家たち34組38人もまた、今後のさらなる活躍が期待される。出展者は以下のとおり。

- 飯山千里(飯山千里建築設計事務所/02年理工建築修了)
- 石川昂(アーキテクチャー・ラボ 石川昂建築設計事務所/04年理工建築卒業)
- 石崎哲也(石崎建築設計/05年理工建築修了)
- 磯崎洋才(建築創作研究所/05年理工建築卒業)
- 梅原智洋(KAP/10年理工建築修了)
- 江泉光哲(4FA/06年理工建築修了)
- 大西正紀(グランドレベル/mosaki/03年理工建築修了)
- 大平貴臣(OSKA&PARTNERS/04年理工建築修了)
- 緒方彩乃(家劇場/CCC T-SITE/16年理工建築修了)+小笠舞穂(家劇場/KAJIMA DESIGN/16年理工建築修了)
- 落合正行(日本大学理工学部まちづくり工学科/PEA.../落合建築設計事務所/05年理工建築修了)
- 金井直(カナイデザイン/00年理工建築卒業)
- 金子太亮(空間研究所/07年理工海建修了)
- 川又哲也(戸田建設/09年理工建築修了)
- 菅野龍(シーラカンス K&H/00年工修了)
- 岸田佳晃(05年理工建築卒業)
- 北村直也(北村直也建築設計事務所/03年理工建築卒業)
- 桔川卓也(NASCA/07年理工海建卒業)
- 國眼一成(久米設計/08年理工建築修了)
- 菅原大輔(SUGAWARADAISUKE 建築事務所/00年理工建築卒業)
- 鈴木智香子(日本設計/05年理工建築修了)
- 須藤晶子(メック・デザイン・インターナショナル/04年芸術学部卒業)
- 夢田吉宏(石本建築事務所/03年理工建築修了)
- 土屋毅(ツチヤタケシ建築事務所/99年法学部卒業)
- 西崎暢仁(大成建設/03年理工建築卒業)
- 福井啓介(かまくらスタジオ/07年理工建築卒業)+森川啓介(かまくらスタジオ/07年理工建築卒業)
- 福島孝志(日建設計/05年理工建築修了)
- 藤田雄介(Camp Design inc./05年生産卒業)
- 間田真矢(MAMM DESIGN/00年工卒業)
- 三好礼益(日本設計/08年理工建築修了)
- 山田達也(竹中工務店/10年理工建築修了)
- 横井創馬(07年理工建築卒業)+小野志門(09年理工建築修了)+北川健太(08年理工建築卒業)(セカイ)
- 横堀将之(米田横堀建築研究所/04年理工海建卒業)
- 吉野誠一(よしの/07年理工建築修了)
- 渡辺真元(渡辺真元建築設計事務所/08年理工建築修了)

サテライト会場・北千住
家劇場 設計・運営/緒方彩乃



サテライト会場・上池台PP.8-9 喫茶ランドリー



写真/グランドレベル

ダンサー、建築家、デザイナー、アーティスト、ディレクターという自分の夢を表現する場を開くために、北千住の築80年の長屋を改修したプロジェクト。ここで「暮らす」中で、無理のないサイズの空間を運営。「やりたいこと」を「家事」のように行うことで、手が届く「非日常」を創出する。

かつて駄菓子屋だった小屋と住まいとなる母屋で構成されており、小屋をロビー、母屋の居間を劇場、玄関を楽屋に改修して、生活しながら、時折上演する。観客だった人たちから企画を相談されるようになり、バザーや座談会など、地域の人たちの夢を表現する場にも進化。小さな劇場が送り手と受け手の境界を曖昧にし、地域の人たちと、夢と場をシェアする空間が実現している。

——現代において、建築家は単に設計をすればよいわけではない、と菅原さんは考えているように思います。なぜ、「FUJIMI LOUNGE」(2018)での活動を考えたのか、最初の動機を話していただけますか？

菅原◎フランスで生活をした影響は非常に大きいです。それまでは、建築物自体に興味がありましたが、パリでは一つひとつの建築物が素晴らしいとともに、街全体としての居心地のよさがあると思いました。日本に帰ってきて、建築設計を続けながら、都市的・広域的な提案ができなにかと考えていました。そうしたら、知らぬ間に地域活性化拠点の設計に携わる機会が増えていきました。

いろいろな視点が求められる地域拠点や地域自体の設計で、モノのカタチに落とし込むことは少しできたという感覚がありました。しかし、そこで起こっているコトに踏み込まないと、さらに上のハードルは越せないとも感じていました。クライアントの事業も、設計した風景も、未永く存在してほしい。そういう想いから、場所の骨格となる場の運営自

体を自分でやってみたいと考えたのです。それを最終的には審美的なカタチにつなげたいと考えました。

——最初に関わった地域活性化拠点は、どのようなものですか？

菅原◎「よこてのわがや」(2015)という、秋田県の横手市にある拠点です。秋田の食材を通販で扱いつつ、その産地に旅をしてもらうビジネスを展開している友人がいました。当時、僕はビジネス交流会を定期的に開いていて、地域で活動を行う人たちが多く集まっていました。そのひとり、実際に場所を構えて、高齢者を含めた地域の人たちが集えるような場をつくりつつ、秋田の山奥の生産地と東京や仙台の消費地をつなぐような場をつくらうと、サークルキッチン付きの古民家改修を依頼してくれました。

そのあと、ここに訪れた人から声を掛けていただき、同じ秋田の五城目町で地域拠点を設計しました(「下夕町醸し室 HIKOBE」(2018))。さらに、そのプロジェクトに関わっていた人が、東京と五城目町で2拠点

居住を行っていて、その方の依頼で、千代田区神田で「錦町ブンカイサン」(2018)に関わりました。

——そういう中で、どんなことを見出していきましたか？

菅原◎日本の中山間地域などでは、消滅可能性が指摘されています。もちろん、そのすべてのお手伝いはできないのですが、僕に設計を依頼してくれる人びとは、自分たちの地域の魅力を信じて、それを継承し、進化させたいという意気込みや責任感をもっていました。そんな仕事でどり着いたのが、小さな拠点群を開発し、それをネットワークさせて地域全体を面的に開発していく、「マイクロ・パブリック・ネットワーク」という考え方です。そこでモビリティと地域開発の重要性にも気がつき、自分の足元の調布市と協力して、空き家と公共空間とモビリティに関するイベントを行っています。

最近、都市と田舎の価値が転倒するのではないかと考えています。体験の価値は大きくなり、昔はお金を払ってやってもらっていた農業や工作を、お金を払って自分で体験しています。その体験の宝庫こそが田舎です。一方、田舎は、病院や買いものがたいへんという話がありますが、ITや自動運転、ドローンといった技術がインストールされたら、その不便さはキャンセルされます。そうすると、住みづらいといわれている田舎が、都会に対して優位に立つときがくるのではないかと考えています。だからこそ、モビリティと建築の関係を考えることはおもしろいのではないのでしょうか。



写真/後藤連平

——自宅の転居をきっかけに調布に来たそうですが、この場所をどのように見えていますか？

菅原◎住んでみて驚きだったのですが、都心から近い田舎という状況です。特急で新宿から15分ですが、生産緑地が70以上あります。都心にアクセスしやすい田舎で、すごくポテンシャルが高いと思いました。もうひとつは、観光地としての充実度。神代植物公園や深大寺蕎麦、都内で2番目に古いお寺の深大寺には国宝の仏像もあります。歴史や文化遺産の集積に驚きました。日常生活のプラットフォームと観光の風景を重ねる取り組みを全国でやってきましたが、都心近郊の調布で同様のポテンシャルがあることに驚きました。

——「FUJIMI LOUNGE」をつくらうとしたきっかけは？ 仕事として他者のために考えることと、自分がそれをもつことは、違うように感じますが。

菅原◎きっかけのひとつは、パリで見たレンゾ・ピアノの事務所です。1階の模型室が街に開いていて、職人が模型をつくっている様子を通りから見えます。それを見て、路面店のような街に開かれた設計事務所をやりたいと思いました。

ふたつ目は、地域拠点の設計が増えてきたということ。地域の場づくりを事務所の一部に併設したいと思いました。そうしたら、昔は地域の

中心だった元酒屋が、駅と自宅との間で空き家が残っていたんです。

——カフェというスタイルを選んだ理由はなんですか？

菅原◎僕がやっている地域拠点の仕事は民間主導で、そのすべてに共通しているのが、カフェ的な軽食業態が入っていることです。人を集めることを目指して、社交場という意味をもつラウンジという呼び方をしています。また、民間の公共空間の社会実験場として、地域・教育・食・カルチャーを掛け合わせたイベントを仕掛けています。

地に足つけて、顔が見える設計事務所にしたなら、いろんな人が集まるようになりそうです。住宅地の中にあっても、文化やデザインに触れて時間を過ごしたい方が使っています。

——建築的なデザインについては、どのようなことを考えましたか？

菅原◎非常に小さな空間なので、この限られた場をいかに使い尽くすかを考えました。モノ・コトと人の居場所を同時に解決するシンプルなカタチを考え、3つの波型を用いています。それによって高低差や広さによる多様な居場所群を設けて、人それぞれの集い方と留まり方をデザインしています。「まちのリビングとカフェ」という言い方をしている、カフェであり、地域住民のみならず、自宅のリビングの延長であってほしいと考えています。

——ここで行ったコトのデザインは、満足度のいくものですか？

菅原◎満足いくように、ふたつ目標を立てて活動しています。ひとつ目は、ローカルな仕事でグローバルな価値をつくること。仕事としては非常にローカルだけど、世界で評価される風景をつくりたい。それが少しは実現できていると思っています。ふたつ目は、建築家として、「理論に終わらず、ソフトに甘えず」場所のカタチを進化させること。理由を知らなくても、かつこいいとか、魅力があるとか、行ってみたいと思わせるものをつくることのできるか、それが重要です。

カタチを決める材料として、ソフトや理論はとても重要です。だけど、理論的に正しいとか、ソフト運営をしているからといって、空間そのものがダサくてもいいというのは違うと思っています。建築家はやはり最終的に魅力的なカタチをつくらなければいけない。物理的な身体を意図せずとも、拘束力してしまう物理的な場所に、建築家としてちゃんと向き合いたい。この場所で、少しはできていると信じたいですね。(19年11月3日、FUJIMI LOUNGEにて)



Sugawara Daisuke
1977年東京都生まれ。2000年日本大学理工学部建築学科卒業。03年早稲田大学大学院理工学研究科修士課程修了。04年 C+A tokyo / シーラカンスアンド・アソシエイツ。04～05年 Jakob+Macfarlane (仏)。06～07年 Shigeru Ban architect Europe (仏)。07年 SUGAWARADAISUKE 設立。



写真/後藤連平

——「上池台の住宅 いけのうえのスタンド」(2016)を、自宅1階に開いたきっかけを教えてください。

落合●大学に通える範囲に住まいを構えることや、2011年に立ち上げた設計事務所を妻と運営していきたいこともあり、事務所兼用住宅を都内につくろうと思いました。そのとき、手が届くのは狭小地しかなく、都心で住宅をつくるとなると、どうしても防火や防犯を考え、閉ざされていくような建物になってしまいます。また、子どもがいない世帯なので、周囲とつながりがもちにくい生活になることが、住み手の危機感としてありました。いわゆる近所付き合いは意図的につくり出さないとできないと考え、事務所を多機能にしようと発想していきました。

——周囲に開くことに対する意識は、どのようなところから生まれてきたのですか？

落合●博士論文(「都市部における住民自治組織の活動拠点施設への支援制度に関する研究」(2018))の

きっかけでもありましたが、みんなが集まる場所はどうかつられているのだろう、という疑問をもっていました。観察していくと、「自由に使っているですよ」と言われている集会施設でも、自由に使われていなかったり、閉ざされたコミュニティの中でしか使われていませんでした。そのとき、所有者の意識が、その場所をどれだけ多くの人が集まることのできる場所にするか/しないかを左右することが、博士論文の研究からわかってきました。そうであれば、場を所有している者が開くという行為からやってみようと思いました。

もともと建物は場所に帰属すると考えていました。建物で周りを変えようという発想ではなく、周りに建物が順応して機能が変わっていくという見方で、そのふたつが相まって、このようになったと思いますね。

——「ワカミヤハイツ あだち農まちプロジェクト」(2015)では、どのようなことを考えましたか？

落合●アパートは消費していく事業で、新築がもっとも価値が高く、

年月日が経つほど劣化していきま。それに対し、成熟させるようなプロジェクトにできないかと考えました。そこに住む人びとのコミュニティの醸成につながる場所を付加するというです。ひとつの住戸を共用部に変える提案をしましたが、いわゆる従来のアパートの収入源である占有部を減らすことに対して、その分の付加価値を足さなければなりません。そこで、建物の構造や設備の更新に加え、事業計画から見直していきました。さらに、足立区という土地柄を見て考えました。昔は、足立区も農業が盛んで、今でもたくさん農地が残っているのですが、ほとんど宅地化されて無機質になっていく街の危機感を、所有者であるオーナーと共有しました。コンクリートのところを剥がして菜園を設けて、それをみんなで食事をする場所と組み合わせる提案を行いました。

——オーナーにとっては、自分のプライベートな部分を切り取り、パブリックに提供しています。そのような視点をなぜ考えたのですか？

落合●僕が大学に入学したときは、建物単体として「よい空間」をつくれれば、それでよいと思っていたんです。しかし、時代が急激に変化を遂げ、実務に就いたころには、すでに人口減少が進んでおり、求められるものから見直さないといけないとか、単にクライアントを信じ切っただけではいけないということが考えられていました。そうすると、これまで当たり前だった、いわゆる型にはまったものをつくるより、本当に必要なものが何かを条件から見直してい

き、提案していかないといけないと考えるようになりました。

——「よい空間」をつくるという価値観が失われ、新しい価値観に変わっていったのでしょうか？

落合●それだけが価値ではなくなったのかもしれないですね。レンジが広がり、やることが多くなった。一方で、自分のプロジェクトにおいて、企画から提案することが過大評価されすぎていて、「よい空間」がないがしろになっているのではないかと、という危機感をもっています。

——その「よい空間」は、今まで考えられてきたものと同じですか？

落合●違うと思います。僕は前提条件から設計していると思っていて、クライアントの条件を整えて、それをさらに上に持っていくのですから、たぶん違うような気がします。具体的に「それがこれです」と見せられるのが一番よいのですが、今は模索中です。

——「スタンド」という言葉をどうして使ったのですか？

落合●気軽に立ち寄ってもらいたいという意味から名づけました。最初は1階部分を全面ガラス張りで作ろうと思いましたが、立ち寄る人の視点からすると、かえって近づきにくいですね。そのため、まずは軒を下げることを考えました。いわゆる招き屋根という形態で、中に入れば空間が広がります。また、立ち寄る仕掛けとして、窓辺にシンクを設

け、カウンターを介して対話ができるように考えました。

——開いているときには、どのようなことを行っているのですか？

落合●私たち夫婦が好きなことや興味のあることを、外部から先生を連れてきて、参加者を募り、私たちも時折参加しながら行っています。江戸風鈴の絵付け体験や盆栽教室など、いわゆる公民館のような使い方です。ただ、場所貸しはしたくないので、自分たちがおもしろいと思うものを、みんなと分かち合う目的で開いています。訪れる人たちは、同世代からおじいちゃん、おばあちゃん世代まで、昔から住んでいる近隣の人たちが、新しく移り住んだ人たちなどさまざまですね。

——その中で、印象的な出来事はどのようなものですか？

落合●例えば、近隣の子どもが鍵を忘れて家に入れなくなって、「ちょっと、いさせてよ」みたいなことはありましたね。些細なことですが、ようやく、そんな関係ができてきたという感じですね。ここでの活動を介して顔見知りが多くなってきました。なかなかふだんは話さないような年齢の人とも話ができて、よかったですと思っています。

——その活動は、落合さんにとってどのようなものなのでしょうか？

落合●ライフワークみたいなものですね。夫婦の楽しみになっています。建築家としてというよりは、一住民

としてやっています。

一方で建築家としては、住宅を設計したりするときのような活動を取り込むことを、クライアントに対して責任をもって勧められるようになりまし。しかし、矛盾しているかもしれませんが、建築家が場の運営までを仕事にしてしまうことには危機感があります。最終的には、よい建築物を、「よい空間」と言われているものをつくり出していけないといけないと思っています。

それには社会の構造自体から考えないといけないのかもしれませんが、いくら世の中が求めるものであっても、それを市場に乗せなければ広まっていけない。つまらない話なのかもしれないけれど、それもまた、僕としてはおもしろい。

——それを乗り越えるためには、何が必要でしょうか？

落合●さまざまな分野の境界における渡し方ではないかと思っています。モノで解決できることが、いちばんよいですが、これから先は、それだけでは立ちいかないと思います。(19年11月7日、日本大学理工学部落合研究室にて)



Ochiai Masayuki
1980年三重県生まれ。2005年日本大学大学院理工学研究科建築学専攻博士前期課程修了。05～11年山中新太郎建築設計事務所。11年PEA...設立。12～14年日本大学理工学部理工学研究員。14～19年日本大学理工学部まちづくり工学科助手。19年～同助教。



写真/堀田貞雄

——「喫茶ランドリー」(2017)のような場所をもとうと思った動機はなんでしょか？

大西●もとうと思っていなかったですね。偶然とノリだけでここに至っています。あるとき、パートナーの田中元子が会社(グランドレベル)をつくらうと言ったんです。そうすると、この上に事務所をもっている「想像系不動産」の高橋寿太郎さんから、「そんなに1階と言ってるんだったら手伝ってくれ」と、メールが届きました。地図を見たら、家の400m先にあるビルで、「ぼくたちの街だ!」となりました。

——グランドレベルは、どのようなことを行っていますか？

大西●日本は、駐車場とエントランスだらけで街がつくられています。海外にはルールがあるのですが、日本にはそういう決まりがない。持ち主の自由でここまでやっているから、こういう街になっていることに気がつきました。建物の1階がとっても大事なことを、一般の人にもわかってほしいと思いました。それで、「そういう1階とはどういうものなの?」とプロデュースしています。

ここでは、自分たちで自由にものができるのだから、「理想的な1階はこういうものだよ」というのをつくらうと。ちゃんと実空間をつくらうと、「あなたの1階でもどうですか?」と見えるようにしました。

——ランドリーのあるカフェは、どのように決めたのですか？

大西●コペンハーゲンのある街に、ランドロマトカフェがあったんです。お店に入ると、とてもかわいいインテリアでした。そこには大学生がいて、みんなで宿題をやっていたんです。他にも赤ちゃんがいて、おじいちゃんもいて、パソコンで仕事をしている人がいて、子どもがおもちゃで遊んでいたりして。この光景を見て、「街の人が全員いるな」と思いました。

——その状況は、どのようにつくられていましたか？

大西●とてもかわいい空間でした。特定のだけかとか、どの世代に媚びるわけでもなく、「みんなどうぞ」という雰囲気だったんです。「ターゲットは誰ですか?」と、特に飲食業界の人に聞かれるんですけど、「ノーターゲットがターゲットです」と言っています。「どんな人でも来てくださいね」という姿勢を大切にしています。雰囲気とランドリーはコペンハーゲンから受け継ぎましたが、0歳から100歳まで来てもらうためには、自分たちで考えないといけないと思っています。

——リノベーションでは、どのようなデザインを行ったのですか？

大西●空間の大枠については、最初は僕と田中と工務店でやろうとしていたんです。元は手袋卸作業を行う場所でした。ランドリーの部分にトラックが入っていました。

プランを先に決めて、途中からブルースタジオが入って、石井大五さんに図面を描いてもらいました。細

かい部分は、ほぼ田中が選びました。例えば、壁のタイルとか、照明とか、マグカップとか。

——はじめた頃はどのような感じだったのですか？

大西●はじめた頃は悲惨ですよ。謎のお店ができて、みんな訳がわからないじゃないですか。怪しさ100%だから。最初の2週間、ずっと僕が店先に立って、通る人に「入って行って」と声をかけ、無料でコーヒーを渡していました。

最初の転機は、近所に住んでいるエミちゃん(現スタッフ)が、「場所を貸してください!」と言ってきたことです。「なにに使うの?」と聞いたら、「パンを捏ねたい」と。当日、10人くらいの近所のママがパンを捏ねていました。パンでクリスマスツリーをつくりたかったそうです。でも、どの家でもやるのが無理だとなったときに「あのテーブルを、この人だったら貸してくれるんじゃない?」みたいなノリで来たそうです。捏ねたパンを自分の家にもっていき、オープンで焼いてきました。その後、完成したパンをもち寄って、みんなでお茶をしていました。パッと外を見たら、お客さんがいたんで



写真/グランドレベル

すよ。ママたちができたパンを配っていたんです。完全にお店のようになっていました。「うん、これだ」と思いましたね。「この感じがいちばん理想だな」と。

——理想のカタチが見えたのですね。

大西●高齢化や少子化とか、世の中で言われている問題は、実は個人における極小的な問題が集まったものだと思います。あそこに歩いているサラリーマンが幸せそうに見えても、実はそうではないとき、新聞には出てこないけれど、本人には大きな問題があったりするじゃないですか。それを、日常生活のふとした会話の中で話すことができることが、実は社会の問題を根底から支えていることになると思っています。

——問題を解決するために、間接的な方法をとっているのですか？

大西●特に日本では、そこが必要なんだと思います。本当に日常の質を変えることをしたい。日常は、ほとんどは淡々としています。ベビーカーを押して来た女性が、「ずっと友だちがいなくて」と言うので話をしていたら、コーヒーを飲みながら涙を流して喜びはじめました。「子育てがたいへんで、誰も友だちがいなくて。この店に入って来て、数か月ぶりにホッとした」と言われ、そういう人が、このエリアだけでもどれだけいるのかと。ここをつくってよかったと実感しました。

——このような場所を、別の地域にも展開していますね。

大西●いろんな人が見に来ています。マンションのデベロッパーとか、行政の人とか。途中からは、医療福祉系の人が増えてきました。地域包括ケアとか、地域で見守りながら医療をするときに、「これくらい場所をつくったほうがよいかも」と興味をもってくれました。お坊さんもたくさん来ました。お寺も昔は地域の中にありましたが、だんだんと壁ができてきて、開かなくなっていくときに、ここへ訪れたのです。

ハードとソフトと、それに僕はコミュニケーションと言っているのですが、日々、どういうコミュニケーションをとって運営していくのかを含めて、全部をプロデュースしています。ソフトは決められないで常に変わっていくような方がいいとか、ハードも人がやりたくないようなデザインでなきゃいけないとか言っていますが、結局、それを有効にとり結ぶのは、その場の人と人との会話だから、そこをどうするかを考えています。

僕らがやっていることを、建築界の人にハードとして求めるのは少し違うと思います。逆に、設計する人が僕らを使ってくれたら、中での過ごし方とか使われ方は、専門的な目で何倍にもしてあげることができると思っています。

——特に問題に感じた建築のデザインとはどのようなものですか？

大西●その建物が並んでいったときに、その街に住みたくないと思うものが多いことです。建ち並んだときに、1階に人がいなくなる街になっていく。大前提として、それはおか



写真/阿野太一

しいと思います。

ここもオープン時はガラスだけで、すごく寂しくて、こうやって家具が外に出ていることとか、階段状につくることとか、「家具屋さんをやってみたら」とディレクションしてあげることとか、ハードとそこに人が入ってくることを合わせて、その場の空間づくりをちゃんとディレクションする能力が必要です。

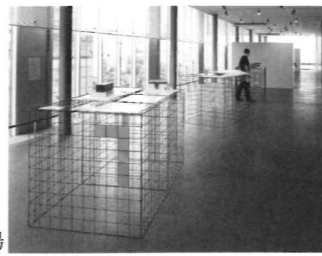
最近、ここがどういう想いでつくられたのかを理解していないお客さんが増えてきました。この街に長くいる人はわかってくれていますが、つついその人たちに甘えてしまっている。無意識のレベルでそうなってしまっているように思います。それが、今の難しいことですね。(19年11月5日、喫茶ランドリーにて)



Onishi Masaki
1977年大阪府生まれ。2003年日本大学大学院理工学研究科建築学専攻博士前期課程修了。03~04年 Ushida Findlay Architects(イギリス)。04年 mosaki 共同設立。04~06年日本大学理工学部建築学科助手。16年よりグランドレベル。

特集
●
建築展覧会考 建築を展示すること

2008年の「U41@NU展」の会場



本物を展示すること

博物館では、資料と呼ばれる本物が展示される。展示の価値は、そこに本物が置かれることにあると言っても過言ではない。それでは、建築が展示される建築展には、どんな本物が展示されているのだろうか？

建築展では、多くの場合、建築物に関する資料が展示される。それらは、図面や模型、写真、映像、テキストなどが一般的である。図面や模型は、設計者自身の手によるものであれば、資料という意味では本物かもしれない。しかし、それらは建築物を建設するためにつくり出されたものであり、その意味では“本物の建築”ではない。一方で、建築物は移動できないので、その体験を展示室に持ち込むために、写真や映像が用いられ、設計者の思考や、その建築物を取り巻く状況を説明するためにテキストが用いられる。さらに、その本物の体験に少しでも近付けるために、実物大の模型、もしくは実際の建築物の部分が展示される。しかし、これらもまた、突き詰めていくと本物とは呼べない。

一方で、実物を見るだけではわからない、原理や仕組みを展示する方法がある。自動車のエンジンを半分に切って内部を見せることで、動きを説明するような方法である。建築でも、特にエンジニアリングを示すとき、例えば、構造を示すために、骨組みの模型を用いたりする。実際の建築物を訪れたとしても、構造体は仕上げに隠されていることが多い。そのため、そのような方法を探るしかない。その場合、そこに存在する原理

や仕組みこそが本物となる。

モノとしては本物ではないが、そこで示されているコトは、本物なのである。

桜建会における建築展

近年、桜建会の主催によって2つの建築展が開催され、筆者は研究室の学生たちとともに、双方の展示デザインを担当した。

2008年開催の「U41@NU 40歳以下の日大出身建築家展」では、展示台の上に図面や模型、写真、テキストなどを並置したが、図面のほとんどはCADで描かれており、そのオリジナルデータからの印刷物を用いた。一方で、2016年に開催された「吉田鉄郎没後60周年記念展」では、手描きの原図を展示できなかったことから、原図のスキャンデータからの印刷物を用いて、展示台の上に並べていった。

後者の「吉田展」の図面は、吉田(とそのスタッフたち)が手で描いた図面が本物であり、そのスキャンデータを印刷したものが複製品であることは明らかだろう。しかし、前者の「U41@NU展」の図面は、建築家たち(とそのスタッフたち)がCADで描いていることから、そのデータが本物であることは明らかだが、それを生きた印刷物が本物でないと言えるのかは難しい。しかし、いずれにしても、そこには建築の本物は展示されていなかった。そして、建築展において建築の本物は、いかに展示できるのか、ということ「A40@NU展」では考えることとなった。

会いに行ける建築展

アイドルグループであるAKB48のコンセプトに、「会いに行けるアイドル」というものがある。翻って、「会いに行ける建築展」とは、どのように考えられるのだろうか？

今回の「A40@NU展」では、メイン会場の他に4か所のサテライト会場を設定している。出展建築家の作品をみていく中で、建築家自身が設計とともに運営に関わり、さまざまなカタチで開いているものがいくつかあることに気づいた。

それらを会場として設定することができれば、建築の本物に展示を行うことができる。幸いにも、それらを運営する建築家たちから快諾を得て、「会いに行ける建築展」が実現することになった。一方で、この建築展では、後輩である学生たちが、先輩である建築家たちへインタビューを行い、その映像を主要な展示物とした。会いに行ってきた建築家たちの表情とともに、その思考を示すものとなる。さらに、会場では、もうひとつの主要な展示物として、建築家たちの作品写真を収めた作品集を配布した。従来の建築展では写真が重要な位置を占めているが、小さく冊子に収めることで、街に冊子を持ち出し、本物に出会うためのガイドとしている。このようにして、「A40@NU展」という「会いに行ける建築展」は実現した。

この場を借りて、この展示会に快くご協力いただいた、すべての出展建築家並びに、その関係者のみなさんに感謝いたします。(佐藤慎也/「A40@NU展」実行委員会委員)

特集
●
建築展覧会考 国立近現代建築資料館 「吉田鉄郎の近代 -モダニズムと伝統の架け橋-」から

「吉田鉄郎の近代 -モダニズムと伝統の架け橋-」展が、2019年11月1日から2020年2月11日まで、湯島にある国立近現代建築資料館で開催されています。2016年に同様の企画が桜建会の主催によって、理工学部のお茶の水校舎で開催されたことがあります。その時は会場と原資料の都合からオリジナル図面の展示ができず、複製の図面による展覧会とならざるを得ませんでした。

力点は住宅作品に

あれから3年、吉田鉄郎関連の全資料の整理検討が終わり、今回の展覧会を開催する運びとなりました。展覧会のいちばんの特徴は、従来の「通信省の建築家」としての評価だけでなく、個人としての吉田鉄郎にスポットを当て、公務以外に吉田鉄郎が手掛けた多くの住宅作品の紹介に力点が置かれている点です。

国立近現代建築資料館の特徴は、所蔵する資料を展示することを主眼としている点にあります。展覧会に合わせて写真パネルや模型を新たに作成するようなことは行っていません。そのため、吉田鉄郎が残したスケッチやエスキース、図面などの展

示が主となっています。

少し地味な展示内容という印象を受けられるかもしれませんが、オリジナルの図面のもつ迫力と、そこから読み取ることのできる思考の過程は、見る人に強い印象を与えてくれるものと思います。

多彩なデザインと、その影響力

吉田の建築家としての活動を支えた最大のクライアントは、吉田の郷里である富山県を代表する馬場家という大富豪です。北前船の廻船問屋から始まり、銀行業や保険業など幅広い経済活動を行った馬場家との付き合いによって、東京における活動の拠点としてつくられた和風大邸宅の馬場家牛込本邸(現・最高裁判所長官邸)を筆頭に、民家風のデザインを取り入れた那須別邸や茶室を備えた数寄屋風の熱海別邸、そして鉄筋コンクリート造のモダニズム住宅である馬場山邸などの数々の住宅作品がつくられました。

これだけ多彩な近代住宅の設計に取り組むことのできた建築家は少なく、しかもそこでの体験を基にして『日本の住宅』、『日本の建築』、『日本の庭園』というドイツ語三部作が

書かれていることも重要です。なかでも1935年に書かれた『日本の住宅』は、日本住宅の優れた特性を多くの海外の近代建築家たちに知らしめた名著として知られています。

今回の展示では、ブルーノ・タウトを始めとする海外の建築家たちとの交流という側面も、新資料の展示と合わせて紹介されています。

建築展覧会の意義と行方

博物館や美術館の基本は“本物”を見せるという点にあります。建築だけは本物を会場に展示することはできません。それでも大正期以降、博覧会や美術展の一環として建築作品が紹介されてきました。

1920年の「分離派建築会」の活動は、自分たちの主義・主張を社会に問いかける目的で展覧会を行うことの先駆けとなりました。建築展は何を目的に、何を展示してきたのか。そして次の時代における建築展の可能性はどこにあるのか。

今回の桜建会報に掲載された「日大出身建築家展」は、その可能性を示唆したものといえるかもしれません。

(大川三雄/理工学部非常勤講師)



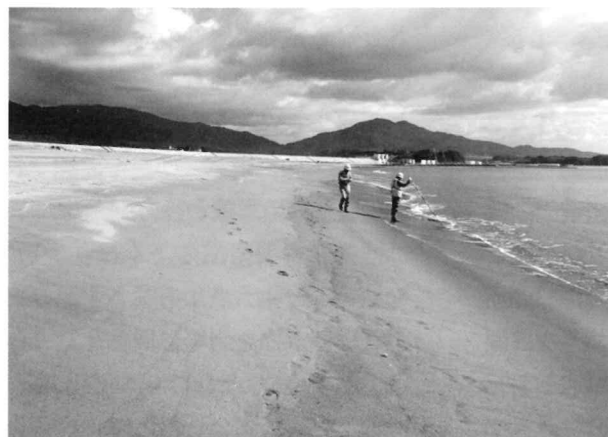
左/オリジナルの図面を中心に展示された会場風景。右/11月30日に行われた「吉田鉄郎の建築とその現代性」をテーマにしたギャラリートーク

研究室紹介

研究テーマ **沿岸環境の保全と防災の両立** 沿岸での侵食・環境消失、津波・高潮対策など、海岸保全に関わる実態分析から保全計画の立案まで、総合的にコンサルティング

研究室名 沿岸環境防災研究室(星上研究室)
教員名 准教授・星上幸良
キーワード 沿岸環境保全／沿岸防災／海岸保全計画／住民合意形成
企業等への要望 共同・受託研究の要請 実作・試作等の協力 研究成果の事業化等
その他(沿岸の開発、保全事業のコンサルティング)

研究概要 本研究室は2019年4月に新設、主に沿岸部での環境や防災に関わる海岸保全を対象とし、実態説明や対策立案に関する研究に取り組んでいます。



東日本大震災時に消失した後、人工養浜で復元した砂浜

前職では民間土木系コンサルタントに30年余り在籍。技術士(建設:河川砂防および海岸海洋)として、国内外の海岸保全事業に携わり、調査解析・対策立案・住民合意形成、また、2011年の東日本大震災以降は震災復興関連業務など、海岸に関する数多くの実務を経験。写真は業務で携わった高田松原海岸の養浜で復元した砂浜です。さらに、海岸侵食問題を中心に、沿岸開発にともなう環境消失や防災リスク増大について調査研究を行ってきました。

沿岸域は人間社会にとって豊かな環境である反面、付き合い方を誤ればさまざまなリスクをとまなう空間です。安全・安心・豊かで住みやすい沿岸まちづくりの実現に向け、次世代を担う優秀な技術者の育成を図りつつ、実務経験を活かした研究成果を社会にフィードバックします。

連絡先◎海洋建築工学科 船橋校舎13号館3階 TEL 047-469-5396 E-mail・星上幸良/hoshigami.yukiyoshi@nihon-u.ac.jp

研究テーマ **鋼構造のさらなる可能性を探る** 鋼構造の耐震性能の評価、耐震設計への提案

研究室名 石鍋研究室
教員名 准教授・石鍋雄一郎
キーワード 鋼構造／耐震設計／鋼材系ダンパー／数値解析
企業等への要望 共同・受託研究の要請 実作・試作等の協力 研究成果の事業化等 その他

研究概要 当研究室は、鋼構造を対象として骨組の弾塑性および動的な性状を把握して耐震性能を評価し、より合理的な耐震設計を目指す研究を主として行っています。研究はいわゆる従来の耐震構造からスタートしましたが、BCPの観点などからより高い耐震性能が求められる社会的背景もあり、必然に免震・制震構造を実現する鋼材系デバイスの性能評価や設計法、またそれらを備えた骨組の地震応答性能評価の領域に発展しています。新耐震がスタートして40年近く、「新」と呼ぶのもためられる時間が経過しました。その間、さまざまな技術や知見が蓄積されてきましたが、それを統合された共有の体系、いわば「新・新耐震」に昇華させることは、大学研究室の果たすべきミッションと言えるものであり、その実現に寄与していきたいと考えています。

研究活動は理工学部建築学科の鋼構造・対雪設計研究室の中島肇教授とも共同で行っており、鋼構造の魅力、可能性を高める研究に取り組んでいます。

連絡先◎短期大学部建築・生活デザイン学科 船橋校舎9号館2階923A TEL 047-469-5630 E-mail 石鍋雄一郎/ishinabe.yuichiro@nihon-u.ac.jp

研究室紹介

研究テーマ **地震時における建物の耐震性能向上に関する研究**

研究室名 振動システム研究室
教員名 教授・千葉正裕
キーワード 立体振動／地震応答／常時微動／応答解析
企業等への要望 共同・受託研究の要請 実作・試作等の協力 研究成果の事業化等 その他

研究概要 本研究室では、建築振動学に関する幅広い研究を行っています。大別すると3つになります。①日本大学工学部における地震動観測。これは、工学部構内に設置された地震動観測装置の記録から、郡山市域における実地震動の実情を明らかにすることを目的としています。②多点常時微動測定。これは、32成分を同時に測定できる常時微動測定装置を用いて、近年、多くなってきている平面形や立面形が複雑な建物、不連続な剛性や強度分布を持つ建物などの立体振動性状の把握を目的としています。③新しい振動解析手法の開発。これは、建物をモデル化し、地震時の応答をシミュレーション解析する際に必要となる、新しい振動解析手法やモデル化手法などの開発を目的としています。このように、本研究室では、建築振動学を通して、建物の耐震性能向上に役立てるための研究を行っています。

連絡先◎工学部建築学科16号館2階 TEL 024-956-8733 E-mail 千葉正裕 chiba.masahiro@nihon-u.ac.jp

研究テーマ **海洋建築物の構造計画・構造設計** 新しい価値を有する海洋建築物を提案し、その海洋建築物の実現に向けた技術的な課題の解決策について研究

研究室名 海洋建築構造デザイン研究室(恵藤研究室)
教員名 准教授・恵藤浩朗
キーワード 海洋建築物の構造計画・構造設計／海洋建築物の新コンセプト／フィジビリティスタディ
企業等への要望 共同・受託研究の要請 実作・試作等の協力 研究成果の事業化等 その他

研究概要 「海の“チカラ”で未来はもっと素敵になる」というコンセプトのもと、新しい価値を有する海洋建築物を提案し、その海洋建築物の実現に向けた技術的な課題の解決策を創造する研究活動を展開しています。そして社会が「海」に対し求める価値を主軸とし、新しい社会を構築する海洋建築物を提案し、海的作用を直接受けるそれらの実現に必要な設計関連技術のすべてが当研究室の研究課題となります。以下に研究テーマを示します。

- ①海洋建築物のニューコンセプトの提案とその実現可能性に関する技術的な検討
- ②海洋構造物と海洋波との相互干渉影響などを考慮した運動応答特性の把握と性能評価
- ③係留システムを含めた大型浮体式海洋建築物の構造解析や、構造安全性の確保とその評価
- ④デジタル情報技術を活用した海洋建築物の適地選定手法の開発
- ⑤数値計算による生態系ネットワークの解明



深海の特性を応用した次世代水素生産・貯蔵エネルギー施設の提案



連絡先◎海洋建築工学科 船橋校舎13号館4階 TEL 047-469-5730 E-mail 恵藤浩朗/eto.hiroaki@nihon-u.ac.jp

事務局だより

第40回建築講座 & 特別維持会員懇親会開催

11月20日(水)18時より、理工学部駿河台キャンパス1号館で第40回建築講座が行われた。今回は構造の観点から、国立代々木競技場

に関わった村田龍馬氏、有明体操競技場に関わった西谷隆之氏を講師に迎え、「二つのスポーツ施設をめぐって」をテーマに講演された。

講演後、特別維持会員の懇親会「桜建ふれあい2019」が同1号館カフェテリアで開催された。67名の参加者が集い、盛会に終わった。

青森研修旅行報告

11月9日(土)～11日(月)にかけて、研修旅行が実施された。今回の目的地は青森で、古建築から現

代建築までの貴重な場所の見学ができた。参加者は23名でとても楽しい旅となった。

「NUアート倶楽部」第7回アート展開催

第7回アート展が、10月21日(月)～26日(土)まで、理工学部駿河台キャンパス1号館5階CSTギャラリーにて開催された。今回の出展

者は79名(一般48名+学生31名)であり、21日の夕方から懇親パーティーが同一号館のカフェテリアで盛大に行われた。

新入特別維持会員・賛助会員入会企業のご紹介

新規入会者 氏名/卒業年/勤務先 (令和元年6月8日～11月8日) 5名

熊倉 毅一	生産工-H24	(株)熊倉工務店	相田 康洋	理工海-H21	日本大学理工学部
高橋 直也	理工建-63	(株)フジタ	菅原 遼	理工海-H22	日本大学理工学部
小谷 朋央貴	理工建-H2	(株)フジタ			

新規入会法人名 (令和元年6月8日～11月8日) 1社

株式会社熊倉工務店

桜建会報 NO.116 2019-December
 発行人 斎藤 勇
 編集 桜門建築会広報委員会
 〒101-8308 千代田区神田駿河台1-8-14
 日本大学理工学部内

広報委員会
 委員長 佐藤慎也(理工学部建築学科)
 副委員長 塩川博義(生産工学部建築工学科)
 矢代真己(短期大学部建築・生活デザイン学科)
 委員 大川三雄(理工学部建築学科)
 山本和清(理工学部海洋建築工学科)
 亀井靖子(生産工学部建築工学科)
 齋藤俊克(工学部建築学科)
 北川健太(セカイ)
 大西正紀(mosaki)
 西山麻夕美(フリー編集者)

桜建会事務局
 住所・所属の変更、クラス会の開催、投稿、会費、名簿など桜建会全般についてお気軽にご連絡、お問い合わせください。
 理工学部駿河台校舎タワー・スコラ7階708奥
 TEL03-3259-0649 FAX03-3292-3216
 E-mail kaiin@okenkai.jp
 ホームページ http://www.okenkai.jp/
 専任/星野麻衣子
 非常勤/櫻井佐和、大木明子
 業務時間/AM10:00～PM5:00(月～金)

学部ニュース

トピックス①

◎山田義文専任講師は、(公社)日本建築士会連合会機関紙「建築士」平成31年3月号に「Life time care homeに見るバリアフリー」と題して寄稿した。
 ◎森山修治教授は、3月13日、日本建築学会講演会「建築火災安全設計の考え方と基礎知識」において、「早期発見・早期避難のためのシステム」および「消防活動の確保」と題して講演した。
 ◎出村克宣教授は、3月29日、日本材料学会東北支部平成30年度「材料フォーラム」講演会で、「ポリマーセメ

ントモルタルの特性」と題して講演をした。
 ◎速水清孝教授は、4月13日、JIA 城東地域会主催「なりたて建築士のための設計コンペ 公開講習会」で、「68歳の建築士法を考える」と題した基調講演を行った。
 ◎出村克宣教授、西田電君(出村・齋藤研、M修了)、齋藤俊克准教授、掛川勝氏(大濱・出村研、M修了)は、5月24日、論文「試験時の応力増加速度並びに供試体の形状および寸法がポリマーセメントモルタルの圧縮強さに及ぼす影響」で、2018年度日本コンクリート工学会(JCI)東北支部論文賞を受賞した。

◎速水清孝教授が執筆した『日本の近代・現代を支えた建築-建築技術100選-』(共著、発行/日本建築センター・建築技術教育普及センター)が6月19日に出版された。
 ◎出村克宣教授は、5月31日、Polymers-in-Concrete 委員会第181回定例会において、「ポリマーセメントモルタルの特性に関する最近の研究成果」と題して講演をした。
 ◎土方吉雄元准教授は、6月19日、都市計画法・建築基準法制定100周年記念式典で、建築基準法関係(個人)部門・国土交通大臣表彰を受賞した。



海洋建築工学科トピックス①

◎11月18日、学生団体のSNOWが主催する「歴史的空間再編コンペディション2018(第7回)」で、佐藤信治研の根本一希君(4年)、佐々木秀人君(M2)、金井亮祐君(M1)、桜井南実君(4年)、小林陽太君(3年)、松下将也君(3年)、中村数基君(3年)、中村美月さん(3年)の作品「見えない奥に暮らす」が5位(197作品中)入賞した。この作品は、秋田県横手市増田

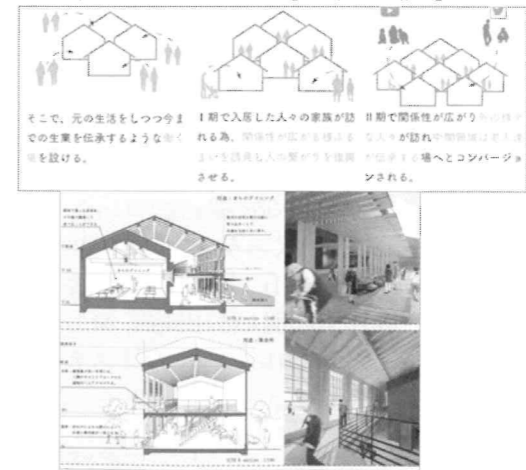
の伝建地区に残る家の中の内蔵に着目し、表から見えない歴史的空間とのつきあい方を提案するもの。
 ◎3月19日、デザイン女子No.1決定戦2019NAGOYAの「卒業設計展・『女子』という視点」で、渡辺真理恵さん(佐藤信治研、4年)の作品「意職住-意思のある人々が住み職で復興する-」が、都市・建築部門で1位を受賞した。

建築学科トピックス①

◎与那嶺仁志非常勤講師が、「道の駅ましこ」によって「2019年第14回日本構造デザイン賞」(主催/日本構造家倶楽部)を受賞した。
 ◎「JIA東北住宅大賞2018」(主催/日本建築家協会(JIA)東北支部)で、神田順客員教授、西一治氏(アトリエ71)の「潮見第」が「奨励賞」を受賞した。
 ◎「第54回地盤工学研究発表会」(主催/地盤工学会)で、小林亮太君(山田・道明研、M2)の論文「低拘束圧時における豊浦砂のせん断剛性の評価 ベンダーエレメント試験を用いた検討」が「優秀論文発表者賞」を受賞した。
 ◎「2019年度日本音響学会騒音・振動研究会」(主催/日本音響学会騒音・振動研究委員会)で、後藤佑太君(富田研、M2)の論文「実住宅における複数の振動源を対象とした振動応答量と振動感覚評価に関する検討」が「学生優秀発表賞」を受賞した。

生産工 トピックス①

◎2019年度日本建築学会大会学術講演にて、博士後期課程 大木文明氏(社会人ドクター森林総合研究所・師橋研所属)が「CLTを用いた鉄筋コンクリート複合床スラブの曲げ性能その2 比例限荷重、降伏荷重および最大荷重」で木質構造部門優秀発表賞を受賞した。
 ◎故金井清先生(元本学副総長・生産工学部長)の原爆被害調査資料が、広島平和記念資料館で報道関係者に公開された。NHKで放送されたほか、中国、朝日、毎日の各新聞で報道された。
 ◎三上功生准教授が、7月30日NHK EテレのハートネットTV「HEART-NET TIMES 7月」に出演し、「障がい者の熱中症」について解説した。



左/「道の駅ましこ」 右/「潮見第」



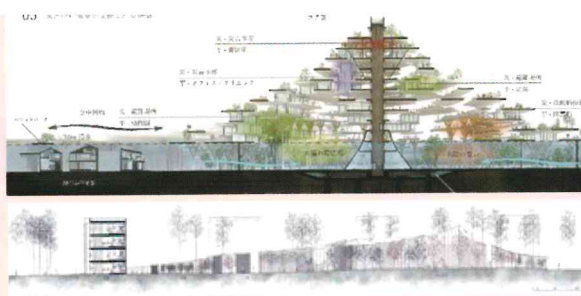
写真/MOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIO



海洋建築工学科トピックス②

◎3月9日、JIAが主催する卒業設計展「第21回千葉建築学生賞」で、勝部秋高君(佐藤信治研、4年)の作品「水都の樹冠」が最優秀賞、市民賞を受賞し、JIA全国大会参加権を得た。また、根本一希君(佐藤信治研、4年)の作品「痕跡の行方」が特別賞を受賞した。

◎3月24日、キルコス国際建築設計コンペティション2018(主催/キルコス国際建築設計コンペティション実行委員会)で、山本淳樹君(4年)、蒲生良輔君(M2)、三枝晃君(4年)、西村寿々美さん(3年)、郎敬禹(3年)(佐藤信治研)



左上/「水都の樹冠」 右上/「ウォーターウェルネスキャンプ」
左下/「痕跡の行方」

の作品「衣的建築」が金賞含む11の審査員賞を受賞した。テーマは「寒/暑 Heat and Cold; Embracing the Climatic Extremes」。

◎3月25日、2019赤レンガ卒業設計展(主催/赤レンガ卒業設計展2019実行委員会)で、高橋遼太郎君(佐藤信治研、4年)の作品「ウォーターウェルネスキャンプ」がアストリッド・クライン賞を受賞した。

左/「衣的建築」



建築学科トピックス②

◎「第34回釜山国際建築大展2018(国際アイデアコンペティション)」(主催/韓国建築家協会釜山建築家会、日本建築家協会近畿支部、天津市建築学会)で、田口周也君(今村研、M2)の作品「Accumulating barracks」が「大賞」、小田島立宜君(今村研、M1)の作品「Hyper School」が「奨励賞」を受賞した。テーマは「Transformation Form, Use, Landscape」。

◎「第11回ハーフェレ学生デザインコンペティション2019」(主催/ハーフェレジャパン)において、建築学専攻2年の田口周弥君(今村研、M2)、小川朋大君(田所研、M1)、小田島立宜君(今村研、M1)の作品「命のものさし」が「優秀賞」を受賞した。

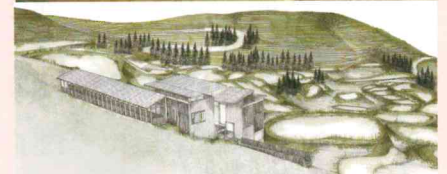
◎「第15回『新・木造の家』設計コンペ」(主催/森林をつくろう)で、小田島立宜君(今村研、M1)、宇佐見拓朗君(古澤研、M1)、小川朋大君(田所研、M1)の作品「大黒柱のレシピ」が「トステム賞」を受賞した。



トピックス②

◎3月29日に行われたJIA東北学生卒業設計コンクール2019において、兵頭秀子さん(浦部研・H30年度卒業)の作品「地図にない建築-内海を漂う方舟-」が優秀賞を受賞した。また、6月22日に行われたJIA全国学生卒業設計コンクールに出展し、審査員特別賞(石田賞)を受賞した。

◎4月7日に行われた第8回E&G Design 学生デザイン大賞(主催/東海エクステリアフェア実行委員会)において、小野菜津実さん(浦部研・H30年度卒業)の作品「星峠-棚と小屋がつくる未来-」が、公共・都市空間のエクステリア部門で優秀賞を受賞した。



上/「地図にない建築」 下/「星峠」

上/「Accumulating barracks」 中/「命のものさし」 下/「大黒柱のレシピ」



トピックス②

◎2019年度日本建築学会設計競技「ダンチを再考する」で、高橋朋君(4年)、鈴木俊策君(4年)、増野亜美さん(4年)、渡邊健太郎君(M1)のチームによる「ソラニワ団地～住む下町、集う上町～」が、9月3日に建築学会北陸大会で行われた。全国2次審査で優秀賞を受賞した。

また、伊藤拓海君(4年)、古田広大君(4年)、横山喜久君(4年)の「切って、繋いで、賑わって～分けることで新しく育つ団地～」が、タジマ奨励賞+関東支部入選。池田光君(M2)、小室昂久君(M2)、三浦恭輔君(M2)、飯野淳也君(M1)、澤嶋伶君(M1)の「大きなポストと空の配達員」が関東支部入選。堀内那央さん(4年)、樋田美鈴さん(4年)、樋口明浩君(4年)の「私と故郷、緑つなぐ団地アーカイブ～空き家を解消生まれ変わるまち～」が北陸支部入選した。なお、受賞学生はすべて岩田研究室所属。

左上/「ソラニワ団地」 上右/「私と故郷、緑つなぐ団地アーカイブ」 左下/「切って、繋いで、賑わって」 右下/「大きなポストと空の配達員」

